

虹の回想

鹿児島市内のデパートの前で啓子がバスを降りた時はもう二時を回っていました。車外に出たとたんジワッと熱気に包まれます。南国の、頭上から焼かれるような強い陽射しを避けて、啓子はそそくさと店内に入ると、肌に当たる冷房の風が心地よく、ほっと息をついたのでした。

啓子が、定年になった夫の郷里である鹿児島に東京から移り住んでもう四年。年金生活になってからは、殆どの虚礼は廃していたのですが、頂いた返礼を欠かす訳にはいきません。不況のため配達料のサービスが復活したデパートの中元売出しを利用しようと、一人家を出たのは正午過ぎのことで、一日七本しかない市内行きのバスに飛び乗ったのでした。

夫と姑の簡単な昼食は用意したものの、どこか間の抜けている啓子でした。身支度に手間取って、自身はまだ昼食を取っていませんでした。

ここはデパートなのだから食堂もある筈だとエレベータの前にある案内を探すと果して最上階にそれはありました。

食堂の入口には、色鮮やかな見本がずらりと並んでいます。適当に人だかりもして、お値段も手頃なものばかりです。啓子はその中から寿司と蕎麦のセットを選ぶと、二三人の列の後にならんでチケットを買い、奥まった席に入口の方を向いて座ったのでした。

昼どきを過ぎていたので六分通りの入りでしょうか。右前に座っていたポロシャツを着た色黒の老人には、ビールのジョッキが運ばれて来ました。キロキロとあたりを見回しながらゆっくりと口を付けています。半券がまだあるところを見るとこれから軽食でも取るのでしょうか。

左横には山盛りのチョコレートパフェを嬉しそうにつついている小学生の姉妹と母親がしそうにつついている小学生の姉妹と母親がいて、やがて対面の父親には大盛りのカレーライスが運ばれて来ました。

ああこうしたところで、こうした様々な人達、特に子育て真っ最中の家族の雰囲気に触れたのは、何年ぶりだろうかと思ひました。

入口に目をやると、大きな観葉植物が置かれていて、すりガラスの仕切りの上に葉を垂らしています。この感じもデパートの食堂として一般的に馴染みのものだなあと懐かしく思うのでした。

啓子は五児の母なのです。長男と末娘は十五才も離れていましたから、子供との付き合いもそれだけ長く、どの子も外食するのは大好きでした。あれこれの思い出が臉をよぎります。そうだ、末娘と新宿でパフェを楽しんでも、すでに十年近く経っているのだと啓子は指折り数えてみました。

夫が役職に着いた後は、家庭サービスも少なくなると、啓子は買い物も連れ立って行くのは末娘くらいになってしまいました。こうしたデパートの大衆食堂で、家族がそれぞれが好きなものを食べた思い出は、上の子たちがまだ子供の頃のこと、夫も啓子もまだ若い頃のことでした。子供には日の丸の立っている「お子様ランチ」と相場が決まっていた、啓子たちもそんなに高いものを取る余裕のない時代でした。

その後啓子も勤めに出るようになり、比較的外食の機会も多く、天麩羅とか鰻とか寿司・蕎麦などの専門の店にはよく行きましたが、それは

目的が食べるということを出掛けたものでした。考えてみれば、親の買い物に付き合っただパートに行くなんてことは、子供が何才くらいまでのことだったのでしょうか。特に男の子は付いて来なかったと思うのです。

生きていくことに欠かせぬ食事。そしてこの六十年間に様々な人と食堂との出会いがあったと啓子は改めて思いました。

遠い日を懐かしんでいた啓子の前に、両手のバランスを取ってリズムカルな歩みで近づいて来た女店員さんが、片手の「寿司蕎麦セット」のトレイをスッと差し出して立ち去りました。見るとそれは見本のセットより随分と貧弱なものでした。

「まあ、お値段から言えばこんなものなのかしら」

啓子はちょっとがっかりしながら、テーブルに置かれた湯飲みのトレイから一つを取ると、ゆっくりと茶を入れたのでした。

啓子が初めてデパートの食堂を体験したのは、小学三年生のときでした。昭和十七年のことです。夏休みに母の節子に連れられて弟妹と一緒に信州から上京し、銀座を歩いた後のことでした。

あれも暑い日でした。歩道は行き交う人で溢れていました。真夏の日差しの下、薄いモスグリーンの縮みの一重に白っぽい組の帯を締めた節子は下の妹を背負い、汗だくになりながら歩いていました。両方の袂を小学校に入学したばかりの弟とその二つ年下の上の妹が握りしめ、人混みに従って進む母の歩調に合わせて、チョコチョコと小走りに歩いていました。啓子はやや後を、あちこち眺めながら歩いていたのです。

三人の女の子は、お揃いのワンピースを着ていました。節子が青緑の縮みの着物を倒して、近所の仕立屋さんに仕立ててもらったものでした。ボタンが背に付いたもので、ギャザーのスカート。袖は当時流行のプックリとふくらんだ提灯袖で、ベルト通しには2センチ幅の臙脂の別珍のリボンを通して、大きく蝶々結びにして後ろに垂らしていました。

暫く行くと、とある道脇の柳の木陰にカメラを持った中年の男が立っていて、写真を撮ったかと思うと何やら紙片を節子に渡すのです。男は他の人たちも適当に選んでは同じことをやっているようでした。節子は

「まあ、こんな見っともないところを撮るなんて」

と言ってその紙片を捨ててしまいました。訳のわからない啓子は、行きずりの人のスナップを売るのだと母に説明してもらって、東京にはそんな商売をする人もいるのだと目を丸くしたのでした。

紙片は捨てられ、写真屋の名前も分からず実物も見ただことはないのに、啓子はその時の映像がはっきりと想像出来て、いつかそれを本当の写真のように思い浮かべるのでした。髪を引詰めに結って、末の妹を背負ったまだ若い母と、その回りを囲んで炎天下を歩いている三人の子供たち。それが、モノクロの画面となってそれぞれの表情、いや自分の表情までが固定されて浮かんで来るのです。

そのあと皆で三越の食堂に入り、アイスクリームを食べたのでした。銀色の容器に半月型に盛られたそれは、子供たちには別世界の食べ物のように思えたものです。ウエハースはもう姿を消していましたが。

前年に太平洋戦争が始まっていて、夫を戦地に送り、信州の両親のもとに

身を寄せていた節子は、はしゃいで食べる子供たちを満足そうに静かに眺めていました。それまで住んでいた世田谷の松原町の家は貸しておいたのですが、夫の聡順の研究室として使っていた笹塚の家は空き家のままになっていて、年に一度、風を通したり、雑用を済ますために上京していました。そしてその度に子供たちを遊園地や動物園などに連れて行くのを楽しみにしていたのでした。

戦況は日々報道されてはいたものの、まだ遠い処のことと思えました。その頃学級で父親が出征している人は、啓子の他にもう一人いるだけだったのです。

白いテーブルクロスが掛かった丸いテーブルに座って見回すと、天井に大きな扇風機がハタハタと回っていて、上から水の流れる白い柱の横に大きな葉の南洋の植物が置かれていました。啓子は、全体をパステルカラーの水色と白に整えられたそのハイカラな店内をしっかりと目に焼き付けていました。そして友達の誰も知らない素敵な世界を知っているんだという優越感を覚えていたのです。

当時は信州の諏訪から新宿まで六時間半もかかりました。そして多分まだ、啓子のクラスには東京へ行ったことのある人はいなかったのです。

戦争が烈しさを増すと、食料品も乏しくなり、もう食堂どころではありませんでした。二合五勺の配給米も滞って、雑穀入りのご飯が普通となり、代用食と言ってすいとんや芋などが主食に登場して来ました。

そしてこの食料不足は、終戦後一段と厳しくなり、節子はリュックサックを背負って農家の遠い親戚まで頼って買い出しに毎日出掛けるようになりました。節子の妹一家も身を寄せて来ていて、合わせて十人の子供たちを食べさせねばならなかったのです。母の留守中、六年生の啓子は如何に少ない米で夕食を作るか、あれこれ工夫をしたものです。かまどの薪も大切に完全燃焼させるように気配りをしたものでした。

やがて本町通りに「物々交換」の店が出来て、厚手の軍服やオーバーが並ぶようになりました。交換の品物は米だったか、それは許されていなかったかは記憶にありません。ただ正式のルートでなく、いわゆる闇で様々な品物が出回るようになるまでには時間がかかりませんでした。

父の聡順が中国から復員して来たのは、昭和二十一年の五月でした。本来の仕事の仏典研究では収入もなく、食べ盛りの四人の子供たちを抱えて生活出来ません。彼はつてを頼って、鼻緒を仕入れ、農協や鉄道の購買部に卸す商売を初めたのです。商品は下駄やゴム靴と多くなって行きました。そして傷痍軍人の授産所も作り、輪になったりポンを仕入れて鼻緒の生産も初めたのです。

戦後の品物のない頃は、不格好な鼻緒も飛ぶように売れたものでした。店は若い傷痍軍人たちで活気に溢れ、女学校に入ったばかりの啓子も多分当時としては多めの小遣いをもらっていました。そして駅近くに開店したラッキーとか蔦屋とかの喫茶店に入って一人でシャーベットを食べたりしていました。

甘いピンク色のジュースを凍らせただけのシャーベットもよく売れたのでしょう。たちまち財を成した蔦屋の主人が女道楽にうつつを抜かして、いつか姿を消したということも当時の話題になったものでした。

昭和二十二年の暮れに福井の在に居住していた聡順の母が亡くなりました。葬儀に聡順は啓子と弟の健一を連れて行きました。節子は二ヵ月前に四女を出産していたからです。

生前二回しか会っていない祖母でしたが、啓子は棺桶とは本当に桶だったという衝撃的な田舎の葬儀を体験したのです。

それはともかく福井では、遠路をやってきた父子は歓迎されました。勧められる輝くような白米のご飯が何と美味しかったことでしょう。今でいう「こしひかり」なのか、米に粘り気と光沢があって、諏訪の配給の米がとても貧弱に思えたものです。

ところが、二日もするとなにか胸につかえて、食べ慣れた黒い三分づきの、しかも麦の入ったご飯が妙に懐かしくなってきたのです。健一も同感だったらしく、

「姉ちゃん、やっぱりうちのご飯がおいしいね」

と言ったことでした。

帰りにポストンバッグ一杯のお米を土産にもらいました。汽車が福井駅に着いたとき、一斉の手入れがあって、何人かの私服の刑事でしょうか、一人一人の荷物をチェックするのです。中身が米の場合は車両から連れだされ、全部没収されていました。明らかに闇米売りを商売にしていると思われるおばさん達で、構内は占められていました。啓子は、大声で嘆いている彼女たちに密かに同情したのです。

幸い聡順は切符を見せて、父子三人が遠路を帰るのだと説明して没収を免れました。そして聡順は折角来たのだからと、途中下車して、子供たちに金沢の見物もさせました。今から思うと、金沢は節子が初めて縁談の持ち上がった聡順と出会った町だったのです。

市電に乗り、兼六公園を見物した後、通りを歩いていると、あちこちに「ぜんざい」という貼り紙のある店がありました。

「『ぜんざい』ってなあに」

と啓子が聞くと、聡順は、

「なんだ、『ぜんざい』も知らないのか」

と目を丸くして近くの店に入りました。甘いもの好きの聡順も実は食べたかったのかも知れませんが、出てきたものは蕎麦猪口ほどの入れ物に薄い餡の汁が入ったものでした。そして中に小型の消しゴムほどのメリケン粉の薄焼きが二切れ入っていました。

「これって『お汁粉』かなあ」

と啓子が言いました。それにしても小豆の粒は見当たりませんでした。信州では当時『ぜんざい』という語は使っていなかったのです。啓子は未だに『お汁粉』と『ぜんざい』が厳密に同じものかどうなのか知りません。

聡順は、期待していたものと出て来たものにギャップがあったのでしょうか。それとも往時を回顧していたのでしょうか。食べ終わってもしばらく無言で遠くを見るような目つきでいるのです。

啓子は四年制の女学校に入学したものの、学制の変更があって、高校の併設中学ということになりました。新制中学は三年で高校になります。敗戦で貧しかった当時は、家庭の事情であと三年間も学校に通わせることの出来ない生徒が一割ほどいたのです。そして併設中学卒業の時点で退学していき

ました。それは本当に淋しいことでした。

一方、多少のゆとりのあった節子は、恩師の勧めもあって、啓子に日本女子大の付属高校を受験させました。節子は二人姉妹で、二人とも日本女子大の卒業生でした。節子の母が教育熱心な信心家で、娘たちの希望をかなえるために大変な努力をしたのでした。当時信州から東京の上級の学校に通わせるということは、とても珍しかった筈です。節子は、亡き母と同じ様に啓子の希望をかなえてやろうと思ったのでしょう。

終戦前後に節子を頼っていた節子の妹一家は、類焼を免れた西新宿の家に移っていました。そして小田急線の郊外にあったその付属高校には、啓子より一級上の娘も通っていたのです。無事入学出来た啓子は、高校に付属した寮に入ることになり、その準備に節子も上京して来ました。

空襲で焼け野が原となっていた西新宿一帯は、防空壕の上に赤錆びたトタンを屋根にして住んでいる人や、廃材の掘っ建て小屋に住んでいる人もちらほら見かけられました。

新宿三越の裏の映画館武蔵野館の脇は、闇市のアーケードで、大変な喧騒でした。デパートで何を売っていたのかは、啓子には全く記憶にないのですが、節子は三越の横町にあるモーリという喫茶店に啓子連れて入りました。

「ここはね、母さんの学生時代からあった店よ」

節子は懐かしげに店内を見回しながら言いました。焼け跡の店の内装は簡単なもので、昔の面影などはなかったことでしょう。啓子は、束髪に縞柄の着物を着て、袴の紐を胸高に結んだ母が、友人たちと談笑しながら蜜豆などつついている様子を想像していました。昭和初期の不況の時代、男女差別も厳然として存在する中、一仏教徒として社会学科を選んだ節子は情熱的な理想家でした。きっとこんな場でも日本の未来、女性の未来などを真面目に話し合っていたのかもかもしれません。

節子は卒業後、仏教界の新進の学者が揃っていた大正大学に女性初めての聴講生となって、社会救済のために仏教学を学んだのでした。聡順との縁談も教授によってもたらされたものでした。それが縁で結婚した節子でしたが、生涯深く聡順を敬愛し、心から献身的に尽くしたのです。

啓子の寮生活は長くは続きませんでした。物のない時こそ順調だった聡順の始めた商売が、だんだん素人では立ち行かなくなって来ていました。そこへ聡順が県下の代理店となって力を入れていた大手タイヤメーカーの始めたゴム長靴が変形してしまっていて、返品の手となったのでした。その対応も素人で相当の損害を被ったのではないかと思うのです。

啓子の学費が家計に負担となってきたことを節子から聞かされて、啓子は二つ返事で郷里に戻ることを受入れました。東京の学校といっても、勉強も生徒もそんなにレベルは変わらないなと思ったこと、大学を女子大に決めてしまいたくないという気もしていました。寮の食事はまだとても貧弱でしたから、啓子も脚気になりがちでしたし、寮生に結核など病人が続出していました。そして何よりも強がってはいたものの、啓子は内心、ホームシックに悩まされていたのでした。一度夏休みで帰郷したことがその思いをかき立てていたのです。

しかし家計の都合上田舎に戻るのだということ、東京に出来た友人に告げることは恥ずかしく思えて、母の健康上とか何とか理由をつけたものでした。ところが、郷里に帰ると平気で「お金が続かなくて」なんて友人に話せ

るのです。かえって節子がそれを嫌がりました。その微妙な心理を啓子自身不思議に思ったものです。

翌高校二年の夏休みが終わると、啓子は微熱のある日が続きました。肺門リンパ腺炎ということで、自分も肋膜炎で療養したこともある節子は、大事をとって啓子を半年休学させることにしました。啓子の栄養に気づかい家族より一品多い食事が二階に運ばれて、啓子は一日の殆どを読書三昧に過ごしました。

節子の買い与えた倉田百三の「光あふいのち」を読んだ啓子は、百三も中学時代に休学し、尾道に遊んで、心豊かな青春時代を送ったことを知り、自分もこの機会を焦らずに自己啓発に努めようと思ったのでした。もっとも百三と違って、彼女の周囲には異性らしい影はありませんでしたが。

やがて進学の時節がやって来ました。啓子は自分の可能性を確かめようと、一番の難関東大のみを目指していました。地元の女生徒で、その女学校の高校から、東大に入学出来た人はまだいませんでした。勿論、男子の大学に向けての受験の伝統も体制も全くない時代でした。手さぐりで受験した啓子は、見事失敗してしまいました。

しかし、簡単には諦めない啓子は、浪人してもう一度挑戦するんだと、西新宿の叔母の家に世話になりながら予備校通いを始めたのでした。

戦災から焼け残ったその家は、叔父の父の広い敷地内に、昔、叔父叔母の新婚生活のために建てられたものでしたから、洋室も二部屋の和室も狭いものでした。そこへ叔父叔母と六人の従姉弟妹たちが住んでいる上に、啓子が加わったのですから、それはもうすし詰めで、とても勉強の出来る状態ではありません。それでも田舎育ちの啓子には、従姉と同学年の従妹の三人で、水道道路の土手の夜道を、大声で歌を歌いながら歩いて銭湯に通ったり、スタイルブックを開いて、手作りのワンピースを作る相談などするのが、結構楽しかったものです。医学生も何人が参加していた従姉のコーラスの集いに入れてもらったことも、新しい体験となりました。

啓子の弟健一と同年の双子の従弟たちも進学準備を始めなければならない頃でした。見比べてもどちらがどちらとも見分けのつかない二人でしたが、性格は悪戯坊主ということを除けば全く異なっていました。兄の博はその頃は目立たない控えめの子で、黙々と勉強していましたが、弟の毅は自己規制のきかない奔放なところがありました。ジョンウエインに似た、しかも全体的にはジェラルドフィリップを思わせる華奢な子でした。それがすっかりアメリカかぶれしていて、時折ジャガイモをベーコンで炒めたようなものを自分用に作って食べていました。まだまだ食料不足の頃でしたが。

ストイックなことが好きで、目標に集中する啓子には、毅の振る舞いは自分の怠惰心に勝とうと努力しないからだと思えて、折りを見ては厳しく忠告したものでした。毅は姉にはすぐに反発して物を投げたりしたのですが、啓子には一目置いてくれました。啓子も内心は憎めない性格であることを知っていて、小遣いに余裕のあるときはちょっとした物など買ってあげるのでした。

あるとき新宿三越の食堂に毅を連れて行ったのです。ショウウインドウに海苔巻きがあったのでそれを注文しました。しかし出された海苔巻きの中身はご飯ではなくて、素麺だったのです。まだお米は統制下で自由に食堂に出

回ることがなかったのです。

食べ盛りの高校生の毅のことですから、それは別に文句も言わずに、あつと言う間に平らげました。しかし啓子は期待を裏切られたその海苔巻きを忘れることはありません。そして長い脚を大きく広げて腰掛け、黙々と食べている毅の、くせ毛を短く刈ったキュートなその横顔も……。

毅は結局ブラジル行きを強く希望して、叔父がそのための手づるを探し、やっと実現することが出来ました。まだ二十歳そこそこでしたが、新天地に夢を託して勇んででかけたのです。

二十数年後日本に一時帰国した彼は、日本の復興の鮮やかさに目を見張っていました。まるで浦島太郎のような気分だったことでしょう。新宿のあの廃墟のような焼け跡が、ピカピカのビル群の林立する街になろうとは、誰が予測出来たでしょう。発展の速度の違いが、その年月の間に大差をつけてしまいました。毅の子供たちは、今は日本に戻って就職しているとのこと。

ところでその威勢良くハンサムだった毅は今はこの世にはいないのです。三年前、啓子は三女の妹から電話を受けました。ブラジルで脳腫瘍の手術を受けた毅の経過が思わしくなく、植物人間になり、それも危篤状態だということです。双子の兄の博が明日ブラジルに発つというので、今は鹿児島にいる啓子は、妹に心ばかりのお見舞いを託してくれるよう頼んだのです。

博が臨終に間に合ったかどうかは啓子は知りません。六十歳を目前にして毅は帰らぬ人となったのです。若い身空で異国に渡り、四十年近くをどのように生きてきたのでしょうか。南米への移民の生活が楽なものだったとは到底思えないことです。

壮年になってさえも、ちょっと見は見分けのつかない程よく似た博と毅でした。黙々と勉強していた博は歯科医として、昭和天皇一家の侍医を勤めるまでになり、栄光の道を歩みました。今は西新宿の家を改築して開業していますが、優秀な次男が後を継ぐとのこと。

青春の頃に踏み出した足の一步の向きによって、大きく人生は変わるものだ、つくづく啓子は思うのです。

さて啓子の進学ですが、こと志通りには行きませんでした。従姉文子の友人の東大の医学生が、啓子の心をすっかり捕らえていました。払っても払ってもその面影が浮かんでくるのです。彼はまた啓子に、こまごまと自分の体験や使った参考書を教えてくれ、何冊かの問題集も貸してくれました。何年か経って啓子は夫にそのことを話したとき、夫は

「男というものは気のない女には絶対そんなことはしないものだ」

と言うのです。でも当時の啓子にはそんな自信は全くありませんでした。誰かがそれを教えていたら、啓子の人生も変わっていたかも知れません。

結局一年前とそんなに変わらぬ実力だったことでしょう。啓子の東大受験は失敗に終わり、第二志望の早稲田の文学部に落ち着くことになりました。医学生への切ない思いも、彼に夢中な文子の手前もあって、きっぱり振り切ることに決めました。

当時の世相はまだ騒然としたものがありました。サンフランシスコ平和条約によって、日本は独立したとはいえ、全面講和ではなくソ連圏は除かれたものでした。学生の政治活動も活発で、キャンパスのあちこちにスローガンの大書された立て看板がありました。そして吉田内閣は学生の選挙権を親元

に移すという法案を提出したのです。

大学の日々にやっと慣れはじめた五月のある日、クラスの集会がもたれました。その法案に反対するというクラス決議をして、デモに参加しようということでした。交通費を支給して学校を休日にもして貰えない以上、親元に出発権を置くということは権利の剥奪というものでしょう。全員一致で決議を採択し、デモにも参加することになりました。

ぐずついた空模様のある日、クラスの一同は、大隈さんの銅像下の広場から何台ものバスに分乗して、反対集会の開かれる四谷公園に向かいました。バスの中は歌声が満ちて、意気軒昂といったところです。

学生の歌声に若き友よ手を延べよ
輝く太陽青空を再び戦火で乱すな
我等の友情は原爆あるも断たれず
闘志は火と燃え平和のために闘わん
団結固くわが行く手を守れ

初めて聞く反戦歌の大合唱が啓子の胸を打ちました。公園には何本かの赤旗が立っていて、幾つもの大学生の集団が列を作って集まっていた。津田塾大など女子大生には、何人かの男性の教授が付いて来ているのでした。集会は大群衆のため演壇で誰が何を話されているのかは分かりませんでした。その後、隊伍を組んで国会までデモ行進をするというのです。学生たちは六列に並んでスクラムを組み行進を始めました。時折、

「学生の選挙法はんたーい」
とシュプレヒコールを叫びながら。

国会の前に来ました。見ると鉄のしゃれた格子の扉は閉じられていて、その前に一間ほどのきちんとした間隔に、黒っぽい服を着て鉄兜をかぶった機動隊員が腰のあたりに銃剣を構えて立っているのです。股を開き中腰に構えた鈍く光る銃剣の先は、まさしく学生の列に向けられていました。

その日の学生集団は、やがてS字を描くジグザグ行進を行った後、各大学単位に流れ解散となりました。啓子は新しく出来たばかりの友達数人と、新宿西口の一軒のラーメン屋に入りました。十人も入れれば一杯になるような見すばらしい店が、西口の路地にハーモニカのように並んでいるその一軒でした。

啓子は出されたラーメンを挟む手も震えるほど興奮していました。お腹は空いているのになかなか喉を通りません。古い能楽の家元のお嬢さんが小柄な体を乗り出して、

「メーデー事件のときはね、機動隊員がこん棒で殴って怪我をさせておいて、あと駅々で包帯を巻いた人を逮捕したんですってよ」
と話すのでした。

「銃剣は私たちに突きつけられていた」という体験は、啓子に権力というものについて考えさせるきっかけとなりました。政治とは全く無縁の世界にいた啓子だったので。

昭和二十九年当時はまだお米のご飯を食堂で食べるには、外食券という配給米の代わりにもらうことの出来る券が必要ということでした。多分実際は

もうそんな規制は無いも同然だったのでしょうが。

ともかく大学の周辺は蕎麦屋とラーメン屋、それに古本屋が雑然と並んでいました。都電の停留場までの狭い通りは、まさに学生の雑踏の場でした。その中の「南州庵」というラーメン屋はよく栄えていました。すんなりとした白い麺で、一杯が三十円。眼鏡をかけたおばさんが、にこりともせずに、大声で、次々と入ってくる学生をさばっていました。名前からして、この店の主人は鹿児島県人だったのでしょう。

その年の秋も深まり、風が木の葉をカラカラと転がすようなある日、日鋼室蘭の労働者がカンパを募りにキャンパスにやって来ました。貧しい時代は、労使双方に不信と猜疑心を生じさせ、労働争議が絶えない時代で、それも長期化していました。

赤い鉢巻きをした室蘭の労働者は困窮の様を切々と訴え、カンパの箱を回しました。秋の短い日はもう暮れかけて、集まった学生は思い思いの金額を箱に入れていました。啓子も百円を入れてから五六人の友人と連れ立って高田の馬場まで歩いて帰途につきました。

道すがらに今川焼きの店があって、店内に簡単な長椅子とテーブルがあり、よく帰りに立ち寄ったものでした。一皿二十円で五個載っていました。その日は啓子が声をかけて仲間と一緒に中に入りました。

「今日は私のおごりです」

と啓子は言いました。財布にはまだ百円札が一枚あったのです。あつあつの今川焼きが五皿並び、冷気に襟をそばだてていた学生達は、ほっとしてそれを頬張りました。

「僕は有り金全部カンパしちゃった」

リーダー格の滝田がぼつんと言いました。

「あっ」

と啓子は思いました。北海道からはるばるやってきて、冬を迎える生活の苦しさを訴えていた労働者に、自分は今川焼きの代金を残してカンパしたのだと思うと、啓子は顔から火がでるほど恥ずかしく、小さくなりました。

その頃大学では、文化祭の準備の真っ最中でした。滝田の提案で、啓子のクラスでは「軍事研究団事件」を紙芝居にすることになり、馬場下の先輩の家に集まって、それぞれ分担した仕事に取り組みました。文章は第一枚目を滝田が担当し、残りの七八枚については啓子が書くことになりました。

一枚目の原稿は

「早稲田大学には門がない」

という書き出しで、なかなか格調のある文章でした。早稲田に門がないということを強調したのはそれからのことだと啓子は思います。そもそも啓子は「軍事研究団事件」なるものについて何も知らず、滝田がよく知っていることが不思議でした。啓子はまず調べることから始めねばなりませんでした。

それは大正末期に軍部が提案して、学内に「軍事研究団」を作ろうとしたのです。これに対して、学生が断固反対し、運動部などとの乱闘もあったものの、結局は潰れてしまったという事件で、早稲田の学の独立にとって輝かしい歴史の一コマなのでした。そしてその先頭に立ち身を張って闘ったのが、浅沼稻次郎たちだったのでした。

啓子の原稿を読んだ滝田は、

「この結論はちょっと違うな」
と言ったのですが、どう違うのかは何も言いませんでした。啓子の書いた結論は「あれから幾星霜・・・」という書き出しで「耳を澄ませれば、軍事力強化の足音が聞こえる。私たちは歴史に学び、戦争への轍を踏まぬようにしましょう」といったものでした。

無事文化祭も終わり、総括の集いが蕎麦屋の二階で開かれ、三十人ほど集まりました。それぞれお互いをねぎらった後、滝田は

「この時代と現代では労働運動の力強さが全然違う。その力を強調していない」

と言うのでした。全く労働運動には縁のなかった啓子でした。彼の主張が正しいとしても済んでから皆の前で言われても、啓子は内心穏やかではありませんでした。どんな蕎麦を食べたか思い出せません。

浅沼さんは当時健在で、後ほど母校で講演されたとき、

「僕たちを紙芝居にしてくれたそうだね」

と嬉しそうに話しました。数年後、壇上で悲劇的な最期を遂げた浅沼さんでした。啓子はその時の笑顔を終生忘れないでしょうし、生前に彼を喜ばせることが出来たというちょっとした満足感も覚えるのです。

卒業して四五年もした頃、滝田から機関紙を送って来ました。池袋に事務所を作ったとのことでしたが、その過激な主張に啓子は目を剥きました。二児の母となり団地に住んでいた啓子には、あまりの感覚の相違に驚いたのです。あの学生の頃から、労働運動を過信していたのだと思いました。そして学生の仲間うちだけの世界に長くいることが、こんなに一般の人々との感覚とかけ離れた主張となってしまったに違いないと思うのでした。

それからまた十年ほど経ち、久しぶりにクラス会を開くという通知がありました。啓子は五児の母となって、生活に追われる日々とでしたから、懐かしい友人との再会を楽しみに心待ちしていました。そんなある夜、テレビの報道に息を飲み、思わず立ち尽くしました。滝田が反対派の襲撃に会って惨殺されたというのです。

その頃は常軌を逸した内ゲバ事件が続発していました。一派の旗頭としての滝田には、そうした運動に対して責任があると啓子は思っていました。幾人の若い命が失われたことでしょうか。有り金全部をカンパするほど心やさしい真面目な滝田が、何故破滅の道を進んだのでしょうか。啓子には、あの紙芝居の結論の差が彼をここまで運んでしまったのだと思われて仕方ありません。

久しぶりのクラス会は滝田への追悼の会となりました。

昭和四十年頃は、啓子は三児の母になっていました。月賦でピアノを買うために二人の女の子を教えたことから始まった啓子の学習塾は、生徒がだんだんに増えて、狭い団地では対応出来なくなりました。そこで、駅の反対側の畑の中にある、戦時中に建てられた社宅集落の中の一戸建ての家を借りることにしました。

浪人することになった啓子の末弟の亨が、斜め前の下宿屋に住んで予備校に通うことになりました。風呂、食事、洗濯を啓子の家で済ませるのです。

夕方、もっそりと現れる亨は、子供たちの人気者でした。何せ帰りはパチンコ屋に立ち寄るのが日課になっていたらしく、その戦利品をポケットに忍ばせて来るのです。キャラメルかチョコレートか知りませんが、包装に付いている券を溜めて、録音機の入ったセッカチ君という人形をもらったほどでした。

憂さ晴らしをパチンコでしていたとしても勉強はそれなりにやっていた筈でしたが、その年は学園騒動の真っ盛りで、有名な安田講堂事件があり、東大は入試をとりやめてしまったのでした。亨はやむなく早稲田の理工科を第一志望に受験したのです。

その年は四十倍の難関となったのでしたが、亨は無事入学出来ました。子供たちは

「奇跡だ、奇跡だ」

と喜びました。

達夫も祝ってやろうと言って、ある日曜日の午後、皆で新宿の聚楽に出掛けました。座敷の円卓に座ってコースの料理を食べるのは、一家にとっても初めてのことでした。皆それぞれ満足したことでしょう。啓子は飲食税というものを取られるということを初めて知りました。

その後、新宿にステーションビルが出来て、六階か七階に横浜の中華料理店が店を出しているのを見つけました。啓子は上京して来た母節子と買い物に出た折り、そこで昼食を取ってみました。肉団子がかかりと揚がっていて、炒め物も美味しく、流石本場の味だと思いました。そしていつか横浜で食べてみたいと思ったものです。

学習塾で教えるばかりでは物足りなかった啓子は、午前中を一年コンピュータの専門学校に学び、近くの手電機メーカーの電算室に嘱託として勤めることになりました。夜は相変わらず中高校生が来ていましたが。

当時、コンピュータの技術者は少なかったので、大変優遇されました。十二月、初めてのボーナスをもらいました。「今だ」と思った啓子は、横浜近くに住んでいた達夫の二人の妹夫婦に電話しました。

「中華街に近い関内駅で待ち合わせしましょう。生まれて初めてボーナスをもらったのです」

そして三家族は駅からタクシーに分乗して、例のステーションビルの店の本店に乗り付けました。子供も入れて総勢十人が、賑やかに円卓に座りました。ビールが注がれ、東京で一堂に集まったことを喜び合いました。達夫と妹たちは十歳以上も年が離れていたもので、親しく遊んだ記憶もないのか、何か遠慮がちにしているのです。

会社に特大のクッキーのような中華のお菓子を買って、啓子はその散財に満足していました。しかしその後、子供たちの成長につれて学費がかかるようになった上、達夫の会社に住宅資金を借りるための積立を始めたことで、家計に余裕がなくなり、大盤振る舞いはそれでお終いになってしまいました。

やがて三百万円の住宅預金も満期になり、達夫は八王子の浅川縁りに建てられた大型マンションを買うことにしました。昭和五十年の冬のことでした。会社からは千七百万円ほど借りて、一番広い九十四平米の八階の見晴らしのよい物件にしたのです。ベランダからは富士が見え、後ろには広い浅川の河川敷があり、運動場もありました。

住んでみると、日常の買い物の出来る店が遠いのが難点でした。月々の口

ーン返済と大学生になった上の子たちの学費のため、勤めを続けていた啓子は、会社の帰りに豊田駅近くの西友で、食料品を仕入れてバスで帰る毎日となりました。休日は、町の中に買い物に出掛け、ついでに昼食か夕食を外食で済ますことも多くなりました。

タンメンやチャンポンの美味しかった食堂難波屋では、店内に向いて主人がくわえ煙草で料理しているのです。啓子はその灰がいつか落ちるのではないかとハラハラしながら観察しているのですが、主人は白い灰が一センチほどになる瞬間、さっと灰皿に落とすのでした。

マンションの近くに出来た回転寿司も繁盛していました。満席で後ろの席に並んで待たされるほどでした。しかし食べ盛りの次男、三男のこと、十何皿も一人で平らげられるので、会計は大変です。啓子も作戦を練って、まず昔風の縮れ麺にメンマの香りも懐かしい竹の屋のラーメンを食べてから寿司というコースを取ることにしたのでした。

やがて長女が嫁ぎ、長男、次男も社会人となって出て行きました。すでに十年が過ぎ、マンション購入時点には保育園児だった五人目の末娘も、いつか中学生になっていたのです。

昭和六十二年春、達夫は定年になり役職を放れました。退職金の半分は住宅ローンの残りの返済に消えてしまいましたが、晴れてマンションは自分のものになったのです。

時まさにバブルの真っ最中でした。達夫と一緒に自治会の役員だった六階の住人が、購入時の倍以上の値段でそれを売り払い、土地付きの家に移ったということが聞こえてきました。その比率で達夫のマンションを売れば相当な額になると啓子は計算しました。

八王子から都心までの達夫の通勤は大変でした。九時に始まる会社に、六時半には家を出なければ電車に座れないのです。揉まれながら一時間以上も立って通うことは、とても出来ません。帰りも同様ですから、大変なエネルギーと時間の消耗でした。

会社を退職したあとは、鹿児島島の田舎に帰り、晴耕雨読の生活をするというのが、若い時からの達夫の希望でした。達夫は定年後もあと五年の勤務が可能でしたが、啓子はせめてそれまで彼に毎日の通勤苦から逃れさせてあげたい、彼女自身もそろそろ辞めたいと思っていました。

思い通りの値でマンションが売れば、五年間を都心のマンションを借りて家賃を払い、下の二人の子の学費を払っても、田舎に家を建て直すことが可能だと啓子は計算したのです。

これは一種の賭でした。売るためにはすでにそのマンションを空けておかねばなりません。思い切りのよい啓子は、達夫の同意を得ると、住宅情報誌を買ってきて、適当な都心の賃貸マンションを探しました。一方八王子の西武デパートの不動産部を呼んで値踏みしてもらいました。当時は大型のマンションは少ないと、期待の値をつけてくれました。

五月半ばには、西新宿に3LDKのマンションを見つけて、一家はさっさと引っ越しました。幸い二カ月後にはマンションは売れました。それは本当に値上がりカーブの頂点で、あとはジリジリと値下がりし始めたのです。

新居の横町の不動通りは、まだ昔の面影があって、豆腐屋や米屋、八百屋、雑貨屋などが並んでいました。休日には、三男と末娘を連れて達夫は不動通

りの買い物を楽しみました。観葉植物や苗の鉢とか、焼き立てのパンを抱えてぶらぶら歩きました。またくすんで年期の入った食堂に入ってニラレバ炒めを食べたりしました。

時には、夕食に新宿駅まで歩き、あれこれの食堂を物色して夕食を済ました後、ネオンや電光の眩しい新宿の街を散策しながら戻って来るのでした。

そんな和やかな日々を震撼させたのは、突如訪れたブラックマンデーです。端株の売買で小遣いを稼いでいた啓子は、計算しているとはいえ、有金をなし崩しに使っている生活に不安を覚え始めました。バブル崩壊が目に見えないところで進行していたのでした。

翌年、次男から電話があって、二人目の子供が生まれるのだが、国立の今の2Kのマンションでは狭すぎるがどうしようというのです。啓子には、ひとり立ちした子まで面倒を見る余裕はありません。しかし、都心の今のマンションの家賃十九万円を出せば、郊外だったら、一戸建ての借家が借りられるでしょうし、一緒に住めば、次男も今の家賃分は貯金することが出来る筈で、いずれは自分の力で広い処に移れるだろうと考えました。

まあ最初の達夫の通勤苦を和らげる目的からは、外れてしまいますが、八王子ほど遠くない、府中辺だったら我慢してもらえるのではと達夫に相談したのでした。

そうしたことにはあまり異議を唱えない達夫でしたから、啓子はまた府中の不動産屋に当たってみました。そして国立、府中、国分寺の境目のあたりに、古い屋敷でしたが七十坪ほどの敷地に二階建ての6LDKの物件が家賃二十万円で見つかったのです。

啓子は、大学の同級生が理事をしている会社のシステム部が調布にあり、そこでまたコンピュータの仕事を始めました。実は彼女はシステム作りの仕事が好きだったのでした。

末娘は、転校して来た中学から中野にある仏教系の女子高校に入学して、自転車通学をしていました。一番のしわ寄せは彼女だったでしょう。京王線の揉みくちのラッシュの通学で、みるみる成績が落ちてしまいました。しかし、負けん気の彼女は何とか中以上の位置を保ってはいたのでした。

昭和も終わり、平成となりました。子会社の役員になった達夫の定年は二年延び、鹿児島に戻るのは、平成六年と決めました。達夫と啓子は、株の優待券で年二回鹿児島に帰って、古い家に風を入れながら、大工さんと打合せをしていたのですが、それもだんだん具体的になって来た頃、達夫はその会社の社長になり、その任期が二年ということで、また一年余分に会社に勤めることになりました。

啓子は調布の会社も六十才の定年を迎えていたので、啓子だけは予定通り鹿児島に戻ることにしました。達夫はあとの一年を三男、末娘と2LDKのマンションで過ごすことにしました。次男は、すでに前年、福島に転勤となり社宅住まいになっていたのです。

平成六年、鹿児島に戻った啓子は、老人ホームから連れ戻した姑と、新築の家で一年を過ごしました。翌年夏に達夫も勤めを終えて故郷に戻ってきました。

さて外食となると、今までと違ってこの近辺には魅力的な食堂はありません。食堂どころか買い物も車で出掛けなければならないのです。啓子は東京

で二十六年前に取得し、専らペーパードライバーだった運転免許証が役立つことになりました。運動神経の鈍い啓子は、本当は運転は好きではないのですが。

夏休みに四国に嫁いだ長女が、車好きの婿さんのワゴン車で、孫たちとやって来るのが二人の楽しみとなりました。初めは、達夫と啓子が下見をして、そこへ案内していたのですが、いつか啓子が行きたいと思っても行けないでいるところへ連れて行ってもらうようになりました。

平成九年の夏は、吹上浜から笠沙の岬を目指しました。道路地図で見ると幹線の赤い線で描かれているのに、その道のなんと恐ろしかったこと。右下の断崖からは、紺碧の海が見えるのですが、その道は細くくねくねと曲がっていて、とても達夫の運転では危ないと思ったことでした。

岬の尖端とおぼしき所に歌碑が立っていました。

神つ代の笠狭の碕に我が足を一度止め心和ぎなむ

斉藤茂吉の歌でした。ああ、歌人として彼はこんなところ迄、行脚したのだと啓子は思いました。当時もここまで車が通ったのでしょうか。

見下ろせば、珊瑚礁を思わせる乳翠色の海が鼻先の岩を巡り、岸边には白砂を透き通す波が洗っていました。啓子も軽く一首。

「神つ代の笠狭」と茂吉の歌碑ありてこの果てまでも来し人偲びぬ

もう十二時を回っていました。山を越えて坊の津で昼食にしようと、車に戻り、再び海岸沿いのジグザグ道を走り続けました。

坊の津は想像していたより、鄙びた町でした。歴史のある港町で、時代から取り残されたような雰囲気、それはそれで魅力があります。啓子は時間にゆとりのある時に、ゆっくり見学したいと思いました。しかし、本日の目的の食堂が全然見当たらないのです。横道に入れない訳はないと思うのですが、日帰りの遠出ですから、婿さんは車を休めることはしません。

町並みも途切れる手前に、それらしき店があったのですが、覗くと中は無人でした。

「仕方がない、次は枕崎だ」

と婿さんは車のスピードを上げました。運転している婿さんには済まないのですが、車窓からの海岸線の美しさは格別でした。

枕崎に入っても国道沿いには食堂らしい看板は見つかりません。啓子が「おさかなセンター」の二階が食堂だったことを思い出してそこを目指しました。もう二時近くなっていました。

「おさかなセンター」の二階の食堂は、大変な混雑でした。五六人が待っていて、呼ばれたら入るのです。一同は中央辺に席を占めました。メニューを見ると「ピンタ定食」というのが目玉のようです。ピンタという鹿児島弁は、達夫がよくピンタがよいとか悪いとか言っていましたから、頭のことだと啓子は分かりました。見回すと鰹の大きな頭の煮物をつついていて人が何人かいました。

「目玉はコンドロイチンの宝庫。栄養満点なのだよ」

と達夫が勧めたのですが、誰も応じませんでした。結局大人は刺身定食、子

供たちは海老フライ定食のお定まりとなって、飲物を注文しました。

それにしても鹿児島県人はあまり外食はしないのでしょうか。よその町に比べて目に付かないと一同は話し合いました。

客たちの声高な会話や、出入りの人の雑駁さが漁師の港の市場という感じでした。

一階の店で、鰹のたたきや塩辛を買って、また出発です。戸柱か番所の浜で開聞を見て、長崎鼻まで行ってから、池田湖を通過して帰宅する予定なのでした。

平成十年の夏は、娘と婿さん二人だけの訪問となりました。高二と中三の孫は、東京に遊びに行くというのです。もう両親に付いて回る時代は終わったようです。

菊池寛を思わせる堂々とした体躯の婿さんは、音大のトランペット科出身で、中学の音楽教師ですが、今年は教頭の講習会に出るとのことです。達夫の勧めでゴルフを始めたのですが、初めてグリーンに出て、ショットを褒められてご機嫌でした。来年からは、達夫の楽しみがまた一つ増えたようです。

近くに食堂のない分、啓子の手料理に頼ることが多くなりました。年金生活ですから少しでも無駄は省きたいところなので、それが正解なのでしょう。

達夫の話し相手に、仕事を終えてから一杯飲みに来て来る若い人達の肴は、殆ど啓子の手料理となりました。但し後片付けは全て達夫がやるのが条件なのです。この頃は、食事の片付けも達夫の分担となってしまいました。

こうして静かに年月が重ねられ、世代が交代して行くのでしょうか。もう人生の残りの時間を測る年代となって、啓子は自分の生きた時代の断片を書き留めようと思いました。

その回想は、ふるさとの諏訪、現役時代の東京、そして祖霊の地鹿児島へと、大きく架かる啓子の生涯の虹なのだと思うのでした。残りの日々も遥かな美しい夢に輝いて過ごしたいという願望も込めて・・・・。